

博士論文の要旨および 博士論文審査結果の要旨

氏 名	福 井 幸 男
学 位 の 種 類	博士（比較文化学）
学 位 記 番 号	文博甲第13号
学位授与の日付	2014年 3 月17日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学 位 論 文 題 目	千利休切腹の原因およびその後の千利休の 死をめぐる言説に関する研究 A Study of Sen no Rikyu's Death: The Circumstances behind his <i>Seppuku</i> , and its Subsequent Treatment
論 文 審 査 委 員	主査 寺木 伸明 教授
	副査 梅山 秀幸 教授
	副査 布引 敏雄 大阪観光大学名誉教授

＜博士論文の要旨＞

千利休切腹の原因およびその後の 千利休の死をめぐる言説に関する研究

福 井 幸 男

はじめに—本研究の目的

豊臣秀吉は、元主君織田信長の創案による「御茶湯御政道」の政治的・経済的効用に、その文化的効用をも加え、それらを十二分に駆使しながら、天正19年（1591）2月4日の奥州の伊達政宗の上洛・臣従をもって、名実ともに天下人に登りつめる。その秀吉の側には、常に「御茶湯御政道」の指南・後見役の千利休が控えていた。しかしながら、その利休は、伊達政宗の上洛直後に、まるで御用済みの無用の長物でもあるかの如く、切って棄てられてしまう。

この利休の秀吉による賜死の真因については、古来多くの研究者が仮説を立てているが、未だにその定まるところをみないのが現状である。そこで本稿では、あらたな視点・角度から、その真相究明を試みるものである。

その具体的な取り組みは、次のとおりである。

第1に、豊臣政権における利休の位置・役割とその変化、ならびに切腹にいたる経緯について跡付け、考察することである。第2に、利休切腹の前後における、豊臣政権の政治情勢について考察することである。第3に、原典史料の分析・検討によって、利休切腹の状況について考察し、その特異性を抽出することである。第4に、利休切腹の原因に関する諸説につい

博士論文の要旨および博士論文審査結果の要旨

て確認し、その批判的検討をすることである。第5に、原典史料の分析・検討によって、利休切腹の原因について考察することである。第6に、第3で抽出した利休切腹の状況における特異性について、分析・検討を加えることである。第7に、以上の検討を踏まえて、利休切腹の真相に迫ることである。そして最後に第8として、利休の死をめぐる、その後の言説の推移について考察することである。

序論 天下一茶湯名人千利休誕生まで

千利休は、大永2年（1522）、泉州堺の今市町で魚問屋を営み中流の納屋衆でもあった千与兵衛の子として誕生し、若年時は与四郎と称していた。この与四郎は17歳の時から専ら茶を好み、書院台子の茶を北向道陳から学び、そして道陳の紹介で武野紹鷗に弟子入りして侘び茶を学んだとされる。こうして両師の大きな影響を受けて、侘び茶を大成させてゆくことになる。その与四郎と称していた利休が宗易を号することになるのは、武野紹鷗のもとへ入門し本格的に茶湯者への道を歩もうと決意した時点の天文9年、19歳の頃のこととされる。

秀吉と彼の元主君信長の茶頭であった宗易との関係が大きく転換することになるのは、天正10年（1582）6月2日に起った本能寺の変による信長の死と、つづく山崎の合戦における光秀の敗死である。この合戦における主役としての羽柴秀吉の登場が、それまで今井宗久と津田宗及の下風に立っていた宗易を「天下一の茶匠」にまで昇格させる大きな契機となる。

ところで信長は茶湯の経済的・政治的価値の創造という、天才的な「御茶湯御政道」を行った。秀吉はこの信長の茶湯の経済的・政治的効用をより多面的に活用させる。つまり、天正13年（1585）3月8日の大徳寺大茶会、同年10月7日の禁中茶会、同15年10月1日の北野大茶会など、茶湯は天下取りの重要な具として駆使される。こうした秀吉による「御茶湯御政

人間文化研究 創刊号

道」の展開のすべてには、宗易（利休）が深く関わっていた、というより宗易なしでは成し得なかったのである。

天正13年7月11日に、秀吉は従一位関白に叙任される。そのお礼の意もこめて秀吉が宮中で天皇・親王・上級公卿らに自ら献茶したのが、有名な前述の禁中茶会である。秀吉が主上に献茶するに際して、それを後見すべき宗易が一介の町人であるというのは、当時の身分制度上不可能なことであった。そこで工夫されたのが、「居士」として世俗的な身分から超越させることであり、こうして「利休居士号」が勅賜される。そして秀吉はこの前代未聞といわれる禁中茶会を、利休の後見により無事終え面目を施すが、利休もまた「利休居士号」を勅賜され、後見役を立派に果たしたことでその名は天下に聞こえ、天下一名人の地位を不動のものとしたのである。

第1章 千利休の豊臣政権における位置および役割

第1節 豊臣政権における千利休の権力基盤

千利休は長きにわたり大徳寺古溪宗陳のもとに参禅し、宗陳の禅語録「蒲庵稿」に「三十年飽参之徒」と記されるほどになる。このことは豊臣政権における利休の権力基盤において、きわめて重要な意義がある。つまり己の明日の命も知れない大名や武将たちにとっての禅は、平安な精神の拠りどころであったからである。その大名や武将たちはまた、「茶禅一味」の世界に入り込んでいたのである。その理由は茶湯が戦国時代においては武士としての嗜み、つまり教養とされていた点であり、また精神の緊張をほぐすという実用的な効用があったためである。そうした状況において、利休は彼らにとっては禅僧に劣らず「こころ易き」茶匠であったに違いない。ここに多くの大名・武将たちが、利休の茶弟たることを望んだ大きな理由が存していたといえるのである。

茶湯は秀吉にとっては、軍事力と関白としての権威に次ぐとさえ言い得

博士論文の要旨および博士論文審査結果の要旨

るほどに重要な、まさに政権維持のために必須のものであった。このような秀吉の政権維持のための重要な装置としての茶湯の師であり後見者であったのが利休であった。そしてまた大名・武將たちにとっても、茶湯はまさに「もののふの習い」のうちでも重要なものであった。その宗匠であり、また天下人秀吉の師でもある利休の権力基盤は、この点においてもゆるぎのないものであった。

同時に堺の納屋衆でもあった利休は、各地の豪商とも通じていた。こうした商人たちは戦では重要な兵站を支援するばかりか、日本国中はもとより世界との交易を通じて得た豊富な情報の提供者でもあった。このような利休の多面にわたる能力全般、中でも広範・多岐にわたる人的ネットワークを基とした情報参謀的能力を重視し、最も信頼を置いていたのが秀吉の異父弟秀長であった。この秀長の利休に対する全面的信頼感が、利休の豊臣政権における権力基盤の根幹をなしていた。

第2節 豊臣秀吉側近としての千利休の役割

秀吉の利休に期待した役割の最大のものは、前述のとおり、何といても「御茶湯御政道」の後見役であった。さらにこの後見役と並び重要なのが、情報参謀的役割であった。それを示す具体的一例が、禁中茶会を開く直前の10月2日付で島津修理大夫（義久）宛に秀吉が出した綸命を笠にきた「天下静謐令」といわれる高圧的な直書に、利休が副状を送っていることである。こうした事実から、この時点での豊臣政権内の利休の地位は、側近中の側近であったことが明らかである。

第2章 豊臣政権における千利休の権力基盤の変化 および切腹にいたる経緯

第1節 豊臣政権における千利休の最盛期と大徳寺三門大修造

豊臣政権における利休の最盛期を端的に示しているのが、島津氏の圧迫について秀吉の救援を求めて天正14年4月5日大坂城にやって来た大友宗麟に対し、秀長がいった「内々の儀は宗易、公儀の事は宰相存じ候」のことばである。また天正17年（1589）の利休寄進による大徳寺三門修造である。ところがこの三門修造については、そのことに大いに功劳のあった利休を顕彰するため楼上に本人の木像が安置されるが、これが後日切腹の表向きの最大理由とされることになるのである。

第2節 大和大納言羽柴秀長の死および千利休の切腹

天正18年（1590）3月1日秀吉は関東の小田原討伐のため京都を出発し、利休も陣中の秀吉に茶を供するため従軍する。しかしその軍中に秀長の姿はなかった。利休の最大の理解者・支援者でありまた彼の権力基盤の根幹でもあったその秀長が、このときすでに病魔にとりつかれていたからである。その病状が重篤化してゆきその権勢が低下してくるとともに、その機を待っていたかのごとく、その年極月頃には秀吉の側近官僚の中から、三門楼上木像安置など利休誹謗の動きが出てくるようになる。そして天正19年正月22日ついにその秀長が黄泉の人となり、利休の権力基盤の根幹は失われる。

ところで、時期は前後するが、秀吉は天正18年7月5日の北條当主氏直の投降により、その父氏政と叔父氏照他を11日切腹させ、13日には小田原城に入城するとともに、徳川家康を北條の旧領へ移封さすことで小田原の陣は完了する。続いて秀吉は17日小田原を発って奥州へと向かう。そして

博士論文の要旨および博士論文審査結果の要旨

翌8月9日会津黒川（若松城）に入り奥州知行割・仕置を終え、ここに天下統一を達成して、8月12日に意気揚々と帰洛の途につき、9月1日には京都に凱旋する。

こうして秀吉は次なる生涯の目標である唐・天竺制覇への夢を膨らませ、その実現化に現^{うつ}をぬかすようになる。その秀吉の夢実現に冷水を浴びせたのが、10月以後奥羽地方で勃発する一揆である。この一揆への伊達政宗の加担が讒言されたことで、一揆鎮圧と政宗対応をめぐり豊臣政権は3ヶ月余にわたり混乱する。しかしこの奥羽問題も翌年正月晦日に、政宗が米沢を発ち上洛の途についたとの報により収束の目処がつく。その報を得た秀吉はこれでいよいよ唐・天竺制覇への第一歩としての朝鮮出兵にむけ、その想を練るためであろうか、閏正月10日尾張清州鷹野へと下向する。ところが秀吉不在中の京都では、利休抹殺計画が密かにそして確実に進められてゆくことになる。

その具体化が同月20日頃から始まる大徳寺三門上への利休の木像安置問題重大化である。そして翌2月3日に秀吉が尾張より帰洛し、4日伊達政宗が千人の軍勢を率いて上洛する。こうして、利休にとっては運命的な事態が続くことになる。同月13日秀吉の命で堺へ追放され、同月25日大徳寺三門楼上の利休の木像が一條戻橋にて磔にされる。続いて同月26日 京都に召喚されて利休聚楽屋敷に入り、28日ついに聚楽屋敷において切腹となる。このように利休の運命は、この木像問題の重大化浮上により突如として暗転し、切腹へと直結してゆくのである。

第3章 千利休切腹前後における豊臣政権の政治情勢

第1節 豊臣秀吉の惣無事令発令・日本全土平定から

伊達政宗上洛について

ここではまず、秀吉による天皇の綸命を大義とした天下静謐・惣無事令

人間文化研究 創刊号

発令から天正15年の薩摩島津氏・同18年の小田原北條氏の討伐、さらには奥州平定へと続く一連の日本全土平定の経過を簡潔に史料から跡付けた。そして次に、秀吉念願の大望である朝鮮・明制覇への着手直前という段階に至っての奥州一揆勃発とそれへの伊達政宗加担という讒言などにおける、秀吉の焦燥とそれらへの対応に焦点を当てながら検証した。そこでは、政宗上洛に対する秀吉の異常な歓待ぶりの中に、その大事業の実現のためにはその障害となり得る政宗問題収束を最優先するという、その着手直前の過敏になっている彼の心理状況が読み取れた。また同時にその実現に現^{うつつ}をぬかしている秀吉の心の隙を衝いて、その裏で密かに進められた、石田三成らによる利休抹殺陰謀と考えられる背景を明らかにした。

第2節 豊臣秀吉の朝鮮出兵について

本節では、まず豊臣秀吉の朝鮮出兵に関して、その発想の発端から島津氏討伐を経て実際の朝鮮出兵にいたる経緯を、当時の文書から跡付けた。その結果、彼が如何に早くからそれに執着していたかというその強い執着性について検証できた。また実際の出兵においては、秀吉得意の事前情収・調査や調略・攪乱工作などを全く無視した、「秀吉らしからぬ異様性」によるやり方であったが、その理由は、「九州御動座記」にみえる、高麗の王が「今迄対馬の屋形ニしたカハレ候間云々」という誤認にあったことが判明した。

第3節 緒戦大勝後の豊臣秀吉の朝鮮陣対応について

秀吉の朝鮮出兵は、その緒戦においては圧倒的兵力により大勝する。ところがその戦は、本営名護屋と戦闘地朝鮮との遠隔地時間差に起因する作戦司令における齟齬に加え、秀吉自身の渡海延引によるその増幅、そしてその結果として戦闘長期化・苦戦化という事態を招くことになる。そこで

博士論文の要旨および博士論文審査結果の要旨

本節では、まずその経緯について史料で跡付け、次に徳川家康らの諫止による秀吉の渡海延引とその意味や影響、さらにはこの諫止が動因となった後陽成天皇の勅書による「渡海制止」の意味するものなどについて考察した。特に緒戦大勝の報を得て秀吉が関白秀次宛に出した「豊太閤三國處置太早計」文書にみる、天皇の北京移徙推進命令などという、「治天の君自認説」とも言える、秀吉生涯の絶頂期における有頂天ぶりと、豊臣政権衰亡への端緒となったその慢心ぶりを明らかにした。

第4章 千利休切腹の状況に関する史料の記述とその分析・検討 および特異性抽出

第1節 切腹後100年以内の史料の記述にみる千利休切腹の状況

本節では、切腹状況に関する切腹当時から江戸時代の関係史料12点を挙げ、その記述内容を点検した。なお、切腹後100年以後の史料は、その信憑性において劣るためここでは除外した。

第2節 千利休切腹の状況に関する史料記述内容の分析・検討 およびその特異性抽出

史料記述内容の分析・検討にいたる具体的な手順・作業の概略は次のとおりである。まず切腹状況項目として次の5項目を挙げ、各史料についてこの5項目に分類した。

- ①「木像の磔」、②「長老衆尋問」、③「利休切腹」、④「切腹後獄門」、
⑤「利休屋敷厳重警固」

次に史料毎の切腹状況項目について整理表を作成し、また切腹状況分析表3表を作成した。続いてこれら分析表により、切腹の状況に関する史料記述内容の分析・検討をしたうえで、史料成立時代および著述者分類区分別の特徴、並びに切腹状況項目別の特徴について考察した。その結果、こ

人間文化研究 創刊号

れら史料の記述には多くの特徴的な内容があることが判明した。それは利休が単に後述する公示罪状で示された理由によって切腹を賜ったという場合に想定される切腹状況とは明らかに異質な特徴であることから、これらを切腹の状況における特異事象として抽出・分類した。筆者はこれら特異事象の解明が、利休切腹の真相究明の核心であると考ええる。

なお、こうした手法により切腹状況を子細に分析・検討し、これらの特異事象に注目しそれを抽出して、本格的に考察・検証した先行研究は見当らなかった。その項目は次のとおりである。

A. 大徳寺三門楼上利休木像安置と問題発生の時期的ずれ, B. 切腹直前の利休木像の磔と切腹罪状の事前公示, C. 切腹直前の利休屋敷の嚴重警固, D. 切腹でありながらの獄門, E. 本人の木像の足で踏みつけた獄門, F. 一條戻橋における木像磔と獄門

第5章 千利休切腹の原因に関する諸説とその批判的検討

本章ではまず、各先行研究毎の切腹原因説を抽出・分類し、次にそれを分類説毎に分析し批判的検討を加えた。その結果、先行研究による諸説のいくつかには、部分的に筆者と軌を一にするものがあることがわかったが、しかしそれらは「木像安置」および「売僧行為」という2件の公示罪状が「恰好の口実」であったが故に、真の原因はこれこれであるという薄弱な根拠によるもので、千利休の切腹という一事件の真相を究明しようとするに際して、最も肝要な事件の状況に関する記録の厳密な調査・分析・検討という基本的手順を踏んでいないということが明らかになった。

第6章 千利休切腹の原因に関する史料の記述とその分析・検討

利休切腹の真相究明には、切腹原因に関する史料の記述内容を分析・検討し、さらに第4章で抽出した切腹状況における特異性の検討・考察を踏

博士論文の要旨および博士論文審査結果の要旨

まあたうえて、総合的に考証する必要がある。ただし、ここでは切腹後100年以後も含めた江戸全期の32史料を対象とした。それは切腹当時からその罪状は公示されており、その後の江戸期に記された記録は、その公示罪状に対する不審に基づくものと考えられるからである。そのため、それらをたどり跡付け、分析・検討することで、逆に真相が見えてくるものと考えたのである。

第1節 千利休切腹の原因に関する史料の記述および分類区分

ここでの具体的な手順・手法は、第4章に準じて行ったため、ここでの記述は重複を避ける。

第2節 千利休切腹の原因に関する史料記述内容の分析・検討

本節では前節で挙げた史料の記述内容について、切腹原因項目毎に分類したうえで、分析・検討を加えた。その具体的手順は第4章に準じたが、切腹原因項目は次の8項目とした。

- ①「木像安置」、②「売僧行為」、③「利休娘側室拒否」、④「大徳寺三門修造」、⑤「利休蔑如扱」、⑥「名物茶器所望拒否」、⑦「茶湯理念対立」、⑧「二条院石塔盗用」

以下切腹原因項目整理表や同項目分析表作成は、第4章に準じたが、本章では切腹原因項目別記述史料数集計表も併せて作成し分析・検討した。

そのうちまず、切腹当時の安土桃山時代の史料は、事件当時の生々しい現状を実際に見た事実や、またそれを聞いた人たちの記述である。そしてその内容は5史料すべてが①木像安置を、また5史料中3史料が②売僧行為を切腹原因として挙げていて、それ以外の罪については記されていないという特徴がある。このことは主たる公示罪状はこの二つであり、同時にその中でも特に木像安置が首罪であったことを示している。しかしながら

人間文化研究 創刊号

ここで忘れてならないのは、これらは処断当局者による公示罪状であるということである。そして木像安置が首罪であると当時の人たちが思ったのは、切腹前に利休の木像を一條戻橋で磔にし、高札で罪状を事前公示していることや、切腹後にはその木像の足で踏ませた形で利休の首を獄門に懸けるという視覚効果満点の処置をすることで、そのように思わされたためであることが判った。

ところが同じ安土桃山時代でも切腹後2年経過時の利休出身地堺の記録には、早くも別の噂が立っていたことが示されている。つまり、③利休娘側室拒否の一件が、切腹の原因だったのではないかとという噂である。これは利休の地元堺では、当局者による公示罪状に早くも疑念が生じていたことを示していることになる。

次に切腹原因項目別特徴として最も目立つのは、木像安置の26史料におよぶ圧倒的記述数である。それは処断当局者による演出効果満点の顕示効果によるところ大であると言わざるを得ない。しかし江戸時代のこの項目の全21史料のほぼ半数は、讒言によるとされている。そして次に目立つのが、売僧行為の13史料と利休娘側室拒否の12史料である。このうち前者は公示罪状の一つであったが、木像安置と比べると記述史料数においてわずかに半数という格段の差があるが、それは前述の理由による。またこの原因に関して記述している江戸時代の10史料が、わずか2史料を除きすべて讒言によると記している。このように二つの公示罪状の大半が讒言によるとされていることは、これら公示罪状は額面通りではないと不審感をもたれていたことを如実に示している。その公示罪状に対する疑念から、その反動として江戸時代になり後者の原因が急増したと考えられる。

以上分析結果の概要を示したが、利休切腹原因にはこのように大きな特徴があることが判明した。利休切腹の真相解明にはこうした多数の史料の分析・検討結果からみえてくるものが重要であるが、先行研究の諸説はこ

博士論文の要旨および博士論文審査結果の要旨

うした手順を踏まない飛躍したものであることを再度強調しておきたい。

第7章 千利休切腹における特異性の分析・検討

本章では第4章で抽出した切腹状況における特異事象を、次の4点の特異性項目として統合分類したうえで、それぞれ節を設け検討・考察した。つまり①木像安置と問題発生の時期的ずれ（特異事象A）、②処断当局による利休切腹処置にみる特異性（同B・D・E）、③切腹直前の利休屋敷の嚴重警固（同C）、④一條戻橋における木像磔と獄門（同F）の諸点である。

第1節 木像安置と問題発生の時期的ずれ

利休が大徳寺三門を修造寄進しその落慶法要が行われたのは、天正17年（1589）12月5日のことである。そして三門楼上に安置された利休木像が問題化したのは、天正19年閏正月20日頃であり、その間には1年2ヶ月半の時間差がある。この時期的ずれという点そのものが、木像安置が利休処罰の単なる口実であったことを裏付けていると考えられる。そこで次の点について検証した。

まず利休は届出のうえ三門修造をしたのかどうかが重要であり、最初に検証した。その結果、鎌倉幕府法および分国法の規定や、天正17年当時の京都が大坂と並ぶ最重要直轄領として嚴重管理されていたことなどから、届出のうえ当局の監督下で施工されたことが証明できた。

次に三門楼上への木像安置であるが、三門修造が利休の私財を投じた寄進であるだけに、その功績を顕彰する寺側の主導でなされたと考えられるべきである。ということは落慶法要時に除幕披露のうえ安置され、監督当局もそれを目撃していたと考えられる。なぜなら三門楼上は密室であり、一旦安置してしまえばそれ以後は特定の寺関係者以外には決して知られること

人間文化研究 創刊号

がないからである。にもかかわらず安置後1年2ヶ月半も後に、それを首罪として切腹させたことになる。だからこそ江戸時代の利休と接点を持った人たちは、これは口実であり真相は利休娘の一件や讒言によるものに違いないといった推測による記録を残したのである。

第2節 処断当局による利休切腹処置にみる特異性

本件特異性には次の三つの要素がある。つまり、前代未聞の木像磔、切腹にもかかわらず獄門、さらにその木像の足で踏みつた獄門であったということである。そこで問題はこうした特異性演出の必要性は何かである。それは、事前の木像磔はこの橋で獄門にするという予告であったと思われることから、はじめからこの橋で獄門にする必要があったことを示している。つまり利休をこの橋でしかも切腹ではあるが獄門にする必要がどうしてもあった。そのために獄門に処すに相応しい口実として、言語道断の不礼不義の象徴としての三門楼上安置の木像が必要であった、ということではないか。このように考えると、木像の足で踏みつけさせるという手の込んだ獄門の意味が理解できるのである。狙いは獄門であったが切腹でありながら獄門に処す理由が必要だったからである。

このような切腹後の手の込んだ獄門は、実は表向き処分であった。ではその真の狙いは何だったのか、また過去にこうした前例はなかったのか、という疑問が生じ検証した。その結果、まず前例としては唯一、同じ秀吉による、前年の北條氏討伐においてみられた。それは前当主氏政とその弟氏照らに名誉ある切腹を認めることで小田原城を開城させたものの、秀吉は北條兄弟の首を、実検に持参した家康の面前で、石田三成に京の一條戻橋での獄門を命じたものである。これは明らかに家康への見せしめを意味していた。それは家康が娘を北條当主氏直に嫁がせ盟約を結んでいたからである。秀吉一流の武家の規範など無視した効率第一主義のやり方である。

博士論文の要旨および博士論文審査結果の要旨

利休切腹後の同じ一條戻橋での獄門は、家康への警告・見せしめという意味で通底する処置だったといえる。

第3節 切腹直前の利休屋敷の嚴重警固

これは一茶人であり家人程度しかいなかった利休屋敷を、上杉勢三千の軍兵により嚴重警固するという特異性である。それは諸大名の中に利休の弟子が多く、彼らが万一利休を奪いあるいは逃亡さすことを恐れての措置であったとされているが、問題はその警固の軍兵の数である。この時天下は秀吉の一手に握られており、諸大名は妻子を京または大坂に人質的に常住させられていることもあり、秀吉に表立って刃向かう者は一人もいなかったのである。それにこれまで利休は一度たりとも逃げ隠れなどしていないのである。にもかかわらず、三千名という極めて異常な嚴重警固をした点が特異であると指摘したものである。この特異性は利休切腹の真相究明のために、極めて重要なヒントを与えてくれると考えられる。そこでその時の洛中の状況からみたこの三千名という軍兵の重みやその狙いについて、それを記した史料の信憑性も含めて、膨大な史料をたどり検証した。その結果、側近官僚に捏造された「反朝鮮出兵密談」に利休が一枚噛んでいる、という疑いに対する警告としての措置であったことが判った。つまりそのような密談は察知済みであり、万一不穏な動きがあれば断固処断するという警鐘であった。

第4節 一條戻橋における木像磔と獄門

第2節の特異事象、つまり切腹直前の木像磔および切腹でありながらの獄門がなされたのは、京都一條堀川に架かる一條戻橋であった。そこでここでは何故それが一條戻橋でなければならなかったのかという疑問を検証したものである。そのためにまず、古代以来橋そのものがこの世と冥界を

人間文化研究 創刊号

つないでいる存在であり、鬼・妖怪の棲みつく異界との境界としての存在であったことを確認した。そのうえで、この橋が戻橋と呼ばれる所以とその特性ならびに利休の獄門との関連について検証した。その結果、一條戻橋の特性などとは全く無関係な、いかにも超現実主義者秀吉らしい、この橋での木像磔であり切腹後獄門であったことが判明した。つまりこうした措置がなされたのは「一條戻橋」ではなく「聚楽大門毛どり橋」においてであり、その目的は武門の統率者としてではなく関白太政大臣としての見せしめであった。そしてその見せしめの狙いは、武門としては密かに一目を置いていた人物に対する官位による威圧であり、その相手とは他ならぬ家康だったと考えられる。このことは、第2節・第3節とも共通しているのである。

第8章 千利休切腹の真相解明にむけて

第1節 千利休切腹における特異性と切腹原因との関連について

前章の特異性が切腹原因の記述に与えた影響は、事件当時の切腹の真相などの事情の全く判らなかった人たちや、その後の利休と接触のなかった人たちには、二つの公示罪状そのままに受け取られたことである。一方利休と何らかの接点のあった人たちには逆影響を与えたことが判明した。それが切腹原因に関する記述にみる讒訴・讒言説となる。

第2節 公示罪状の真相について

これまでの検証経過から両公示罪状が口実であったことが確認できたと思うが、ここでは別の角度から考察した。まず木像安置が真に不敬に相当したのかという観点から、京都および近傍寺院の大門・三門等を調査したところ、知恩院山門楼上への事例が判明した。これは俗人でその山門の造営奉行であった人物夫妻の木像であったことから、利休の事例と極めて酷

博士論文の要旨および博士論文審査結果の要旨

似したものである。この知恩院は徳川家康の信仰が厚く、本堂内脇壇には家康・秀忠および家康母堂の座像が安置されているなど、徳川家の菩提寺である。またこの山門は秀忠が亡き父の菩提を弔うため造営させたものである。このように寺社政策のより厳しくなった江戸期の徳川宗家の菩提寺であるだけに、その山門楼上への木像安置は大不敬の大罪とは見做されてはいなかったといえるのである。

次に、不敬罪による利休処断における不整合と売僧行為罪について考える。前述のとおり木像安置は寺側主導で行ったものであるが、寺院長老衆は大政所や大納言後室の執り成しにより赦免される。このように木像安置が不問とされ主導的当事者の長老衆は赦免される一方、従犯といえる利休は切腹させられるという処断の不整合が生じている。その理由は何かである。このように処罰が逆転した差には、罪状で見る限り売僧行為という加重罪があるだけであり、その差が切腹であったということになる。とすると、この売僧行為罪はよほどの重罪ということになるが、茶道具の鑑定・売買・斡旋は商行為であるから、利休が売買益を得たり、鑑定・斡旋に対価を要求するのは正当な行為である。つまり、正当な商行為が加重罪として生死を分つ結果に至らしめることになったのは、讒言が大きく影響したからだ、と江戸時代の利休と接点のあった人たちに信じられていたのは、そのためであろう。

第3節 千利休切腹の真相解明に向けて

懸案であった奥羽の仕置きや伊達政宗問題は、政宗が上洛の途についたことでひとまず決着の目処がつく。その時点で秀吉マターの国内問題は存在しなくなった。そこで秀吉は後顧の憂えなく閏正月10日には京を立ち、尾張清洲に鷹狩りに出かける。こうして秀吉不在中の京都は、石田三成らにとっては利休抹殺の千載一遇のチャンスとなった。しかもこの前月22日

人間文化研究 創刊号

秀吉の弟秀長が死去していた。秀吉に次ぐ実力者であり三成にとっては目の上の瘤であった秀長は、利休の最大の理解者・擁護者でもあったからである。今や強大な後ろ盾を失った利休を抹殺することなど三成にとっては、「赤子の手をねじる」に等しいことであった。かねてより前田玄以らから木像安置や茶道具鑑定・売買をめぐる利休の噂を聞いていた三成は、秀吉の不在中の京で伊達政宗問題や利休抹殺計画について彼らと密議を凝らしたと推測される。それは秀吉不在中の閏正月20日頃から俄に、木像が大問題とされることになって現れる。

一方尾張下向中の秀吉には生涯最大・最後の夢である唐・天竺の制覇が残っていた。ところが多くの大名は一連の天下統一戦や「鉢植大名」化による相次ぐ移封により、かなり疲弊し厭戦気分になっていた。だからこそそうした諸大名の思惑や動向について、秀吉は逆に最も過敏になっていた。

こうした心境にあった秀吉に、利休切腹命令を決断させた石田三成ら側近官僚の思惑について考えてみた。まず結論を先にいうと、それは彼らが密かに練り上げた策謀によって、その筋書きどおりに秀吉に利休切腹を命令させることであった。そして彼らの策謀は二段構えであり、前述の木像安置の時期的ずれなどの矛盾点は、秀吉から指摘される前に、それが世間を欺くための口実であると告げ、秀吉も承知していた。そのうえで秀吉は、彼らが利休を切腹させる真の理由として密かに伝えた偽情報に踊らされ、切腹を命じてしまったのではないかと思われる。すると、ではその時秀吉が信じ踊らされるほどの重大な情報があり得たのかが問題であるが、それが前述の朝鮮出兵に関する諸大名の思惑・動向だったのである。

ところで利休切腹には伊達政宗上洛問題が絡んでいたと筆者は考えている。政宗上洛を大歓待で迎えた秀吉であったが、これで即朝鮮出兵ができると手放しに喜んでいただけではなかったと思われる。彼の優秀なスタッフをして、「反朝鮮出兵」の動きがないか監視させ、もしあるとすれば未然

博士論文の要旨および博士論文審査結果の要旨

にそれを封じるべく、万全の情報網を張りめぐらせていたと推測される。こうして事態は、利休が上洛直後の政宗や家康らとの妙覚寺での茶会に臨んでおり、それが密かに監視されていたという状況から、2月13日の利休の堺追放、そして26日の京都召喚へと急転するのである。そして前章第3節の「切腹直前の利休屋敷の嚴重警固」という特異事象につながるのである。

それは利休懇意の大名による利休奪還を恐れての警戒などではなく、妙覚寺で内密に行われていると看做されていた家康・政宗・利休の鼎談に対するメッセージだったのではないか。つまりそれは、秀吉の朝鮮出兵計画に対する「反朝鮮出兵密談」という側近官僚らに捏造された進言に対して、その未然防止のために必要な警告メッセージとして、秀吉が命じた措置だったのではないか。そしてまた不穏な動きは断固処断するという警告が、「利休の獄門」だったのではないか。利休の茶会は彼らの密談の場であり、利休は反朝鮮出兵派大名をつなぐパイプ役であると見られた、というよりそのように三成らによって仕立て上げられ、そのように秀吉に吹き込まれ、そしてそのように信じさせられた結果ではないか。このことはまさに、たかが一茶人に三千名の軍を動員したことで裏付けされるのではないか。

ところがあまりにも順調に出兵できたことで、「反朝鮮出兵密談」疑惑に対するある種の不審といった割り切れない気持ちを、利休を切腹させた後で、秀吉が抱くようになったのではないか。それが秀吉の後悔という記述となり、更にまるで利休の死を惜しんでいるかのような、記述や書状となって残ることになったのではないか。

第4節 千利休切腹事件の首謀者について

本節では利休切腹事件の首謀者石田三成説の検証に取り組んだ。ところが、彼の事績に関する本格的な研究が思いのほか少ないことが判った。そ

人間文化研究 創刊号

こで近年著された利休との関係について比較的詳細に記述された著作に関し、批判的に検討を加えることで検証した。それは、白川亨『石田三成の生涯』および小和田哲男『石田三成―「知の参謀」の実像』の2著作である。

そのうち前者は、石田三成非首謀説の立場からの著作であるが、本書における白川氏の三成非首謀説の多くの証例は、不適切なものやそれが確証たり得ないものが多い。つまりそれらの証例の発現時期について考えた場合、利休と三成を取り巻く豊臣政権の政治情勢という状況認識において不十分なものが見受けられた。またそれらの例証を利休と三成が不仲ではなかった事例であるとして、恣意的に拡大解釈してとらえられていたものも見受けられたからである。

次に後者の小和田説について総括すると、本書では利休切腹三成関与説について、内容的には三成首謀説を述べながら、結論としてはそれを否定するという論理矛盾をきたしている。

上記2書の批判的検討を通じて、三成非首謀説は否定し得たのではないかと考える。そこで筆者は、本稿ですでに述べてきた三成関与についての傍証的な史料の記述や状況証拠などについて再度確認するとともに、第4章および第6章に挙げた3点の史料の、利休切腹における石田三成関与を示す記述から三成首謀説を浮かび上がらせた。

第9章 江戸時代における千利休の死をめぐる言説

本章では江戸時代における利休の死をめぐる言説について考察したものであるが、この主題についても、これまで先行研究では誰も試みていない分野である。そこで江戸時代における切腹の状況および切腹の原因に関する言説という両面から考察した。

博士論文の要旨および博士論文審査結果の要旨

第1節 千利休の切腹の状況に関する言説

ここでは、切腹状況に関する江戸全期の14史料を対象として分析・検討し考察した。

まずはじめに、史料の記述内容を点検し、第4章に準じて著述者により分類区分した。また、言説の分析・検討にいたる具体的手順は、第4章第2節に準じたが、分析表としては著述者分類区分毎の史料別切腹状況項目表および時代区分毎の史料別切腹状況項目表を作成し分析した。ただし、切腹状況項目については第4章の5項目は共通とし、別に次の項目を加えて分類した。⑥茶室床で切腹、⑦十文字腹、⑧介錯合図、⑨菅丞相狂歌、⑩潔い切腹の5項目である。

次に著述者分類区分別特徴および切腹状況項目別特徴について考察するとともに、時代区分別の特徴について考察した。その結果、特に利休自身による切腹の仕方においては、江戸時代になって忌み嫌われるようになる無念腹などの烈しい切腹をしたと敢えて記述している史料が目立った。その意味についての答えにいたるキーワードは、⑨「菅丞相狂歌」である。つまり利休は讒言によって切腹を賜ることになったので菅丞相に擬らえた狂歌を残し、当節では「無念腹」とされる「十文字腹」などで切腹したのだ、と江戸時代の利休と関係のあった人たちは記録したことがわかった。

第2節 千利休の切腹原因に関する言説

ここでは、切腹原因に関する江戸全期の26史料を対象として、分析・検討し考察した。分析表としては著述者分類区分毎の史料別切腹原因項目表および時代区分毎の史料別切腹原因項目表を作成した。そしてまず、江戸時代の著述者分類区分別特徴について考察した。その結果について全体を通じてみると、公示罪状に対する疑念がいろいろな形でみられるなど、第6章第2節でみた切腹原因項目別特徴を裏付けることができた。また著述

人間文化研究 創刊号

者分類区分毎にも一歩掘り下げ検討した。

次に時代区分別の特徴について検討したが、特に有意な時代推移による変化を認めることはできなかった。しかし強いて挙げるなら⑧二条院石塔盗用が江戸中期のみにおいて発生している点が若干目立っている。しかしこうした事実は全く証明されておらず、それは誤認によるものであるが、これらの記述の背景には著述者の思想的背景などが浮き彫りされていることが判明した。

以上、利休の死をめぐる言説の検討を通して、千利休という、日本文化を支える基盤の一つでもある日本流茶湯の大成者にして、天下一茶湯名人と称された歴史的文化人にしても、その評価においては、時代・社会政治情勢の変化や立場の違いなどによる、毀誉褒貶の荒波に曝されたことが判るのである。

博士論文の要旨および博士論文審査結果の要旨

<博士論文審査結果の要旨>

申 請 者：福井幸男

論 文 題 目：千利休切腹の原因およびその後の千利休の死をめぐる言
説に関する研究

学位申請の種類：甲（課程博士，比較文化学）

論文概要

本論文は、天下一茶の湯名人千利休（1522～91）の切腹原因について、その切腹をめぐる特異性に注目して解明し、かつその後の利休の死をめぐる言説（江戸時代）の時代別変化・非変化、それら著述者の立場による見方の特徴などを明らかにしようとしたもので、本文だけで A4 318頁に及ぶ大作である。

序論では、本論の前提となる、利休が天下一茶の湯名人になるまでの経緯を先行研究を踏まえて記述している。

第1章で豊臣政権における利休の「権力基盤」を取り上げ、第1節では戦国時代以来、武将の間で茶の湯が重視された事情、つまり「茶禅一味」が武将に受け入れられ、「もののふの習い」の重要なものとなり、特に秀吉政権の茶頭の位置・役割が大きくなったことをおさえ（「御茶湯御政道」浅野家文書）、同時に利休が堺の有力町人（納屋衆出身）で、情報通でもあったことから「情報参謀」としても重要視されたことを指摘している。第2節では豊臣政権の側近中の側近であったこと（たとえば降伏前の島津義久に宛てた書状の副状を書いていることや秀吉の弟の秀長と懇意であったことなど）を史実に基づいて記述している。

第2章で、利休の「権力基盤」の変化と切腹に至る経緯を追い、第3章で切腹前後における政権の、緊迫した政治情勢——この情勢と切腹との関

人間文化研究 創刊号

係が深いことを明らかにしようとしている——を描き出している。つまり、後北条氏の降伏、奥州一揆への政宗の加担説、伊達政宗の上洛、朝鮮出兵の準備、家康の出兵に対する態度、秀長の病死等を明らかにして、当時の秀吉の心境、石田三成らの奉行グループ（官僚）の暗躍しうる空間の出現を重視している。

第4章では、切腹状況に関する諸史料の記述から6つの特異性を抽出し、そこから切腹原因に迫るという分析方法をとる。その特異性とは、A.大徳寺三門楼上木像安置と問題発生の時期的ずれ B.切腹直前の利休木像の礫と切腹罪状の事前公示 C.切腹直前の利休屋敷の嚴重警固 D.切腹でありながらの獄門 E.本人の木像の足で踏みつけた獄門 F.一条戻橋での木像礫と獄門である。

第5章では、先行研究を整理して切腹原因説を15分類し、それぞれの問題点を明らかにして、それらのなかで研究成果と考えられる部分については、以下の章で生かされている。

続いて第6章では、先行研究で使用された諸史料を収集し、それらを解読して切腹原因項目を次の8項目に整理・分類した。①木像安置②^{まいす}売僧行為③利休娘側室拒否④大徳寺三門修造⑤利休蔑如扱⑥茶の湯理念対立⑧二条院石塔盗用

この分析から、主たる公示罪状は、①木像安置②売僧行為の二つであり、特に①が首罪であったことを解明した。また、切腹前に木像を一条戻橋で礫にし、本人の木像の足で踏みつけた獄門ということで、視覚効果満点の処置をとっていたことを指摘する。また、史料の多くが讒言によることをあげており、利休死後、公示罪状に不審がもたれていたことを示しているとする。また、こうした特異な処断のやり方は、家康への警告・見せしめの意味があったと指摘する。

第7章では、第4章で抽出した、利休切腹状況の特異事象を次の4点の

博士論文の要旨および博士論文審査結果の要旨

特異性項目として統合分類している。①木像安置と問題発生の時期的ずれ
②処断当局による利休切腹処置にみる特異性③切腹直前の利休屋敷嚴重警固④一条戻橋における木像磔と獄門である。それら4項目について、それぞれ詳細な検討を加え、公示罪状の木像安置問題は、口実にすぎないこと、上杉景勝勢3千人の兵士による嚴重警固の意味は、朝鮮出兵に向けての、家康らへの警告の意味があったことなどを明らかにしている。

第8章では、二つの公示罪状は、口実であったことをさらに詳しく史料で裏付け（たとえば傍証の一つとして徳川氏と関係の深い知恩院山門楼上には、江戸初期、山門造営奉行の五味金右衛門豊直夫妻の像が安置されていて問題になっていないことを明らかにした）、秀吉の朝鮮出兵計画に対する「反朝鮮出兵密談」という側近官僚らに捏造された進言に対して、警告メッセージとして秀吉が切腹を命じたのではないかと指摘する。そして、利休切腹の首謀者として石田三成を取り上げ、状況証拠をあげて裏付けようとしている。

最後の第9章は、江戸時代における利休の死をめぐる言説を取り上げ、まず切腹状況の記述（14史料）を分析する。時代区分（江戸前期・中期・後期）ごとの分類表から、江戸時代を通じて無念腹という烈しい切腹の仕方の記述が目立っていることを確認し、特に利休と関係のあった人々はそのように記述したことを指摘する。次に切腹原因に関する記述（26史料）の分析から、江戸前・中・後期において有意な差はみられないこと、著述者の立場性の特徴の一つとして垂加神道の信奉者であった山口幸充（『嘉良喜随筆』172頁、史料6-21）などの国学者たちは、事実無根の、二条院の石塔を盗用して利休の墓石を作らせたというような言説を唱えていると指摘している。

以上が、本論文の概要である。

論文の審査内容

最終試験では、以下の点が評価された。

第1に、利休の切腹原因に関する諸説を丹念に解説（研究史の整理ともなる）、それらを15の原因説に分類し、それぞれの説の問題点を明らかにしたこと（第5章）、また切腹原因に関する諸史料を博搜し、それらを整理して切腹原因項目分析表を作成し、検討したこと（第6章）。

第2に、利休切腹状況に関する6つの特異性（A.大徳寺三門楼上木像安置と問題発生の時期的ずれ B.切腹直前の利休木像の磔と切腹の罪状の事前公示 C.切腹直前の利休屋敷の嚴重警固 D.切腹でありながらの獄門 E.本人の木像の足で踏みつけた獄門 F.一条戻橋での木像磔と獄門）を抽出し（第4章）、その事実の史料的裏付けを行い、さらにその意味の究明を行ったこと（第7章）が評価される。なかでも、木像安置と問題の発生の時期的ずれ（1年2か月余）が持つ意味を明確にしたこと、利休屋敷警固3千人の問題を初めて提起し、かつその意味を明らかにしたことが注目される。これらの分析手法により切腹原因の真相解明に相当、接近できたと考えられる。

第3に、さらに罪状公示で記された木像安置問題や売僧行為問題などの理由が口実にすぎないことを明らかにし、そのうえで、実際には豊臣政権内の石田三成を中心とする奉行グループの、利休抹殺策謀であったことを当時の豊臣政権の置かれていた緊迫した政治状況を明らかにしながら裏付けようとしたこと（第8章）。

第4に、研究史上初めて江戸時代における利休の死をめぐる言説を切腹状況と切腹原因に分けて、時代別・著者の社会的立場別に分類してその変化や特徴を解明している点（第9章）。

次に、指摘された問題点について述べる。

博士論文の要旨および博士論文審査結果の要旨

第1に、第8章第4節4「利休切腹事件の首謀者に関する私見」のところの論述に不十分な点がみられることである。三成関与の「傍証的な史料の記述や、状況証拠」などで「再度検討することで、三成首謀説を浮かび上がらせてみたい。」(266頁)とされているが、1)の神祇大副吉田兼見の『兼見卿記』天正19年3月8日条の記述(利休の妻、娘が石田三成によって蛇攻めの拷問にかけられ、2人とも死んだという噂を記録。利休の死後、10日ほどの記録)は有効であるとしても、2)の論述(266～8頁)および3)の史料①千家4世江岑宗左「千利休由緒書」②林信正「利休居士碑銘」③国枝清軒編『武辺咄聞書』の記述に基づく論述は、説得力に欠けるものがある。①は三成の関与を示すものとしては無理があるし、②は切腹より176年ほどのちの史料なので、史料的価値は小さい。③については、史料的価値はあるが、秀吉が三成に獄門にすることを命じたということであって、三成が讒言したとか、首謀者であるとかは、明示されていない。

さらに三成悪役説は、家康ら勝者側のありきたりの視点に立つものだが、改めて三成側の視点で追求し、そのうえで真相を究明していくことが求められるだろう。

このことに関しては、史料的制約(特に敗者の石田側の史料は極めて限られている)により大変困難なことであると思うが、今後さらに史料探索および既存史料の精読に取り組んで、より説得力のある内容にすべきであらう。

第2に、利休の死は「切腹」であったことを「千利休由緒書」の史料批判も行いつつ、その史料によって裏付けようとしているが、当時の史料(『晴豊記』天正19年2月26日条)に利休が「逐電」したというものがあり、そのこととの関連で、「斬首」の可能性もなお残されているので、さらに検討を加えた方が説得力を増すと考えられる。また、利休の死について、文献史学の立場からだけではなく、思想史や民俗学的立場からの追究

人間文化研究 創刊号

があれば、論の展開がより容易になったと考えられる。

第3に、利休の「権力基盤」ということをいくつかの根拠をあげて論じているが、果たして一介の「茶頭」が権力基盤をもちうるかどうか、さらに精密に考究してみる必要がある。

第4に、第9章の分析も、研究史上初めての試みで、研究成果をあげてはいるが、なお関係史料が少なく、比較しにくい項目もあるので、さらに多くの関係史料を探索して、精度を高めるべきである。

第5に、史料の引用文に長いが多いので、必要最小限にとどめる工夫をするか、それが出来ない場合は関係箇所の下線を引くなどして、分かりやすくすべきであろう。

本論文には、上記のような問題点・課題も残されているが、オリジナリティーを有する優れた研究であって、今後の利休切腹原因究明研究の基礎文献ともなると評価しうる。

福井幸男の学位申請論文は、本学「学位規程」第26条の規定にある、「専攻分野について研究者として自立して研究活動を行うに必要な高度の研究能力とその基礎となる豊かな学識を示すに足るもの」という合格基準に達していると判断する。

以上の結果、主査・副査3人一致して、申請者の福井幸男は、博士（比較文化）の学位を授与されるに相応しいという審査結果をここに報告する。

2014年2月10日

審査委員(主査) 寺 木 伸 明

審査委員(副査) 梅 山 秀 幸

審査委員(副査) 布 引 敏 雄